ティーチング・ステートメント

所属　未来デザイン学部　人間社会学科
名前　谷川寿郎
作成日　2023/03/13

【責任】

未来デザイン学部人間社会学科において経営学専攻の教員として経営学分野科目（経営学概論・組織行動論・経営組織論・人的資源管理論・商品開発論・流通戦略論）および、オムニバス科目（人間社会基礎研究・人間社会応用研究）を担当している。また、3 年ゼミ（日本語表現法Ⅲ・人間社会課題研究）と4 年ゼミ（卒業研究）の指導をしている。ゼミにおいては進路指導（就活支援）も行っている。あわせて校務として学科の入試広報センター主任という役割を担い、オープンキャンパスと入試業務の仕事をしている。

【理念】

理念として「社会をモノとして俯瞰する能力を養う」および「自ら問いを立てる」という2つを掲げる。これらの理念を提示する理由は自身の経験による。大学卒業後、27 年間ビジネスパーソンとして働き、その間にさまざまな問題に直面し、それらを自分では解決できなかった。そのため、それらの問題を解決すべく 51 歳で仕事を辞めて MBA に入学し、引き続き、博士後期課程に進み学位を取得した。今でいうリカレントである。

このリカレントの間に学んだことは、環境のなかにある組織に所属する人間は、その組織を、そして、その環境を客観視することが難しい。そのために、自らが生きる社会を対象と捉え、制度をモノのように観察することが重要だということである。また、問いは他者から与えられるものではなく、自らが立てるものだということである。

【方針・方法】

「社会をモノとして俯瞰する能力を養う」ためには、社会科学の対象とその方法について修得する必要がある。方法は以下のとおりである。

・難解で抽象的な理論や概念を具体的な事例等を用いて丁寧に説明し理解を促す。
・わかりやすさだけを重視せず、深く考えることの必要性に気づいてもらうよう心がける。

「自ら問いを立てる」という能力を養うためには、初歩的な学術論文（卒業論文）を完成させるプロセスを学ことが必要である。方法は次のとおりである。

・「書くことを通して、私たちは本当に読むことが出来る。表現があって初めて本当の理解がある」清水幾太郎 (1959) p.8、ということを実践的に学ぶ。
・1.2 年次に読書（活字を読む）の大切さを指導する。
・レポート課題のフィードバックによって文章作成能力を養う。
・卒業論文指導を体系的に行い、自ら問いを立てる方法論を指導する。

【成果・評価】

・着任後の 2 年度間における授業評価アンケートは概ね良い評価を受けた。

・卒論指導を行った学生からは指導の方法および熱量について良い評価を受けた。
・卒論を指導した学生が専攻の優秀賞を獲得した。

【目標】

短期目標として来年度において、客員教授の協力を仰ぎ、より実学的な授業を実施することを掲げる。また、長期的な目標としてリカレント教育もできる教員を目指し、実社会に貢献したいと考える。